教員・保育士養成における実習記録を活用した専門性と意識向上の試み

―観察と記録による子ども理解の深化を目指すための国語力調査から―

An Attempt to Promote Specialization and Awareness in Training of Teachers and Childcare Professionals Using Practical Training Records:

From a Japanese Language Proficiency Survey Aiming for Deeper Understanding of Children through Observation and Documentation

野島　正剛[1)]・山﨑　真之[2)]
NOJIMA, Seigou・YAMAZAKI, Masayuki

キーワード：教員・保育士養成　専門性と意識の向上　実習記録　子ども理解　国語力

1．はじめに

実習記録を活用することで教員・保育士への意識と専門性を高めることができないだろうか。筆者らは教員・保育士養成において、教育や保育に携わる者への意識を高めるとともに、在学中に専門性を高める自宅学習へつながるのではないかと考え、その実践を行ってきた。その中心となるものが「実習記録」である。実習中の学修を記録する「実習記録」を用いた「振り返り」を行うことで、意識と専門性を高めることができるのではないかと、指導方法についての検討を行ってきた。保育所保育指針、保育所保育指針解説書には以下の記載がある。

（1）保育士等の自己評価

ア　保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。

出典：厚生労働省（2008）保育所保育指針　「第四章　保育の計画及び評価　2. 保育の内容等の自己評価」より

（4）保育の質を高める仕組み

…（略）…保育所においては、保育課程、指導計画に基づく保育士等による保育実践の振り返りを重視する…（略）…

出典：厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書「序章　3. 改訂の要点」より

筆者らは実習中の記録を通して実践を振り返ることで、実習生の段階においても専門性や実践の改善を行い、教員・保育士の意識を高めることができるのではないかと試みたのである。「振り返り」は一般的にはとりとめのない言葉の様にとらえられるが、先に示したように保育実践の向上に「振り返り」は必要不可欠なのである。また、振り返りが重視されることについて、和栗（2010）はKolbの経験学習モデルを踏まえ、具体的な体験が能動的な試みに至るためには、内省的な観察によって経験を解釈する振り返りが必要であり、看護や教師教育など「体験を通して学び取る」臨床学習では、振り返りが必須であると指摘している。また、小学校学習指導要領の総則第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」には、各教科の指導には、学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れることを明記するなど、学校教育においても「振り返り」は単に振り返るだけではなく、意味を持った教育活動として位置づけられている。先に示した保育所保育指針においては、「振り返り」の言葉を繰り返して用いて重要性を強調している。このような現状から、教員養成・保育士養成の場においても学習の意図的な振り返りを行うことで学習の意味づけを行う「振り返り」の言葉を用いることが多い。近年ではこの「振り返り」の言葉に加え「省察」が用いられることがあるが、その位置づけは十分な議論がなされていない。保育所保育指針解説書においては、省察は振り返りと同じような位置づけであったり、あるいは省察の過程として振り返りを行う記述があったりしているが、「振り返り」は単独で用いられることが多いのに対し、「省察」は「振り返り」と一緒に用いられることがほとんどであることからも、「省察」の位置づけはこれからの議論をまった方が良い。筆者らは学生に対する指導において「振り返り」の

1）こども教育宝仙大学　専任講師
2）国士舘大学　講師

言葉を使って指導を行っているが、実習における振り返りの意味を伝えることで一般的な意味合いでの「振り返り」ではなく、実習体験による自らの学びを「振り返る」ことで次の実習への自己課題を明確にするものであることを伝えている。

筆者らは、学生が実習で学んだことを振り返る営みから専門性や意識の向上を試みてきたが、徐々に文章や漢字といった国語指導に時間を割くことが多くなってきた。実践での行き詰まりを感じた筆者らは、学生の国語力と実習記録についての質問紙調査を行い、学生の意識や実態を知ることで指導に役立てることとした。この結果を2013年度日本保育学会の研究大会で発表したところ、座長より「先駆的な研究である」との評価を頂いた。本稿はその発表に加筆したものである。

2. 本研究に至る経緯

実習記録は単に実習時の記録を行うものではなく、1日の学修をまとめ、学修に対する反省、考察を行う。この反省・考察が翌日の実習を改善するとともに、翌日の学修目標につながるものである。実習生としての限られた期間、限られた範囲であるが「PDCAサイクル」を体験し、より良い教育・保育を行うための営みを自ら実践することで、教員・保育士への意識を高めるのである。また、実習終了後には不足している知識・技能を自己課題とし、卒業までの期間に教職実践演習などでの学修を通しながら専門性を高めていくのである。

「実習記録」の読み手は実習生だけではない。学校・保育所・施設において教育実習や保育実習の指導を担当している教職員が、実習生の学修を確認するために読むものでもある。また、実習後には実習生の実習事後指導を担当する教員が、実習生の学修を確認するために読むものである。実習生は読み手に対して実習記録を通しながら、場面場面の出来事やその時の気持ちを的確に伝えることが必要になる。的確な表現を行うためには、出来事を見る視点を養う必要がある。日々、記録を行い、研鑽を積むことで、見る力と的確な表現力を養うことにつながるのである。そのためには「わかりやすく伝える」ことを意識することが必要なのである。「わかりやすく伝える」ことは、乳幼児・児童・生徒（以下、総称して「子ども」とする）に対して「わかりやすく伝える」ことにもつながる。「わかりやすく伝える」ためには、読み手を意識する必要がある。実習中に記録を書く経験を通して、単に読み手である教職員を意識するだけではなく、子どもを意識した伝え方を考える契機となる。実習記録は「書く」表現であるが、教員・保育士として「書く」ことを含めた様々な表現を行うためには、相手の状況を理解して伝えることとはどのようなことなのか、相手を意識した表現を行うためにはどのようにしたら良いのか、常に考える必要がある。

一方で、実習記録は観察や実践を記録するものでもある。観察を行う事で子どもを見る力を養うが、ただ観察しているだけでは見る目を養い、子どもの理解を深める事はできない。子どもの様々な場面での姿を記録し、その記録を読み返しながら、問いかけに対する反応や、子ども同士のかかわりの様子、教育や保育を実践する場面での様々反応など、子どもの様子を振り返り、実習記録にまとめる事で子どもへの理解を深める事ができる。その理解から、翌日のかかわりに反映させるだけではなく、子どもの姿を踏まえた指導案を作成する事が可能になる。

実習中はもとより、実習終了後にも記録を元に振り返りを行うことによって、自己課題を明らかにすることが可能である。実習中には翌日からの改善を行う事が出来る。また、実習後には、教員・保育士の職に就こうとする者としての課題を明らかにするだけではなく、自分自身の課題も明らかになる。明らかになった課題について真摯に向き合い、取り組むことで教員・保育士としての専門性を向上させることが可能である。

実習中は当然であるが、実習が終了した後に実施する「事後指導」に至るまでの学修には、「記録」が必要不可欠である。教員・保育士に就くための学修は、実習での学びに加えて、「実習後」の学びを充実させることで知識と技能を高めることができる。そのためにも、教員・保育士という職への意識と専門性を高めるためには「実習記録」における詳細な記録は必要不可欠なのである。詳細な記録を行うためには国語の力は欠かせないが、実習記録を書くことに対して学生は強い不安を持っている。学生に理由を聞くと、その原因として実習記録を挙げることが多い。実習記録とは、学生が実習中に行った学修の記録である。教員養成・保育士養成を行う大学・短期大学・専門学校（以下、「養成校」とする）では、「実習日誌」「実習簿」などと呼ばれる冊子を作成している。

実習記録はその冊子にとじ込まれており、学生は1日の学修や実習のまとめなどを記入することになっている。例えば幼稚園教諭・保育士（総称して「保育者」と呼ぶことが多い。本稿も以下「保育者」とする）養成の場合、1日の学修を「子ども」「保育者」「実習生」のそれぞれの行動について記録する。この際、時間の流れに沿って記述する「時系列形式」、あるいは出来事ごとに内容をまとめて記述する「エピソード形式」で記入する事になっている。加えて、反省、考察などを書き、翌朝には園・施設に提出することになる。

提出された記録は、実習生を直接指導した保育者が目を通し、次いで、園の実習指導担当者が目を通す。幼稚

園・保育所では最終的に園長が確認することが多い。こうして確認された記録には、状況に応じて鉛筆あるいは赤色のペンによって不足している部分や修正が書き加えられた後、実習生に返却される。鉛筆で書き加えられた場合は、実習生に対して書き直しを求めている場合がある。この場合、実習生は修正液などで文字を消し、鉛筆で書かれた内容をペン書きし、保育者が加筆した鉛筆書き部分を消しゴムで消している。しかし、実習生が最初に記入した文字を修正液などで消さずに、新たに余白に記入するよう指導されることもある。このような指導について、方針が一定している園・施設がある一方、実習生を直接指導した保育者や実習担当者、あるいは園・施設長などによって指導方法が異なることがある。このような状況により、実習記録の記入が学生にとっての不安を生む要因の一つとなっている。

実習後に養成校に提出された実習記録を確認すると、「修正」や「不足部分の加筆」には二つの種類があることがわかる。一つは、子どもや保育者を観察できていないだけではなく、学生が見たこと、聞いたこと、動いたことを客観的に文章として表現することができていないことである。例えば、保育者が言葉を子どもにかける際、何らかの意図をもって声をかける。実習生は、この意図や、声をかけられた子どもの反応、その子どもの反応に対する保育者や周囲の子どもの反応などを記録に記入する。記入に当たっては、単に記録するだけではなく、指導を受ける保育者に「わかりやすく伝える」ことも必要なのである。この営みは、保育に適した言葉や用語を使用する練習になり、同時にわかりやすい記録や、報告・連絡に必要なメモや書面作成の練習ともなる。もう一つは。日本語自体の修正である。誤字脱字に加え、「てにをは」から修正されていることも増えてきた。「わかりやすく伝える」以前の問題である。実習後の実習事後指導において学生にそのことを問うと、書くことに対して強い不安を訴える学生が多くいることがわかった。その多くが日本語「国語力」への不安である。

実習指導においては「日本語指導」や「国語指導」を実施することはできないが、そもそも、「国語力」とはどのようなものであろうか。平成16年に文化審議会が「これからの社会に求められる国語力について」と題した答申を行っている。この中で国語力の構造として以下の2つの領域を示している。

① 考える力、感じる力、想像する力、表す力から成る、言語を中心とした情報を処理・操作する領域
② 考える力や、表す力などを支え、その基盤となる「国語の知識」や「教養・価値観・感性等」の領域

この2つの領域のうち、①を国語力の中核とし、②は①に示された能力が働く際の基盤となる国語の知識等の領域としている。また国語力の目安として、「書く力」の具体的な目標として以下の3つの目安を示している。

1. 自分の考えや意見などを正確に伝える論理的な文章を書くことができる
2. 伝統的な形式や書式に従った手紙や通信などの文章を書くことができる
3. 様々な情報を収集して、それに基づいて明確な文章を書くことができる

学生たちが身につけてきた国語力はこの目標に到達しているのだろうか。筆者らは学生たちに質問紙による調査を行うこととした。

3. 第1研究

教員・保育士、特に保育者を目指す学生たちにとって「書く」とはどのような意味を持っているのかを調査することとした。保育者を目指す学生にとっては、保育者の仕事は乳児から就学前の子どもに対する保育を行う意識が高いようであり、実習記録の指導に際しても書くことへの指導に時間を割くことが多いように感じらたからである。

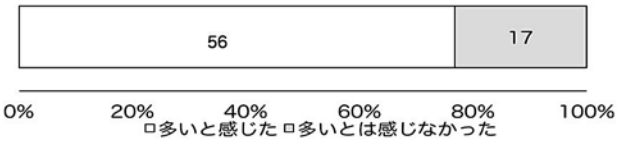
(1) 方法

方　　法　質問紙法による調査
対　　象　K大学3・4年生80名・幼稚園教諭免許状と保育士資格を取得希望する学生
実施時期　2013年1月、4月

(2) 結果

有効回答　73名（91.3%）、内訳：女子60名、男子13名

質問1. 実習前にもっていた保育者のイメージより、「書く」ことが多いと感じましたか。



（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

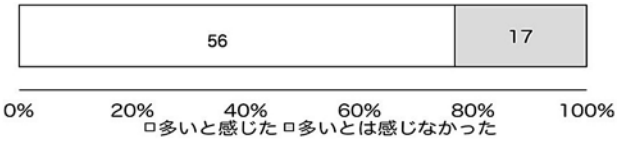
図1　実習前にもっていた保育者のイメージより、「書く」ことが多いと感じましたか。

○「多いと感じた」理由の自由記述
・空いている時、ひたすら先生は書く作業をしていた。

・先生が日誌や指導案を書くと思っていなかった。
・記録や個人ノートを細かく記入しているのを見た。
・「書く」事に対してのイメージがなかった。
・書類なども全て手書きだったので。
・連絡帳や子どもの成長を記録していた。
・ケガの報告書など、様々な記録があった。

○「多いとは感じなかった」理由の自由記述
・現場では書類とか、もっと書くと思っていた。
・もともと記録などがあると思っていたので。
・書く作業は当たり前だと考えていた。

質問2. 実習日誌の記入は大変でしたか。



（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

図2　実習日誌の記入は大変でしたか。

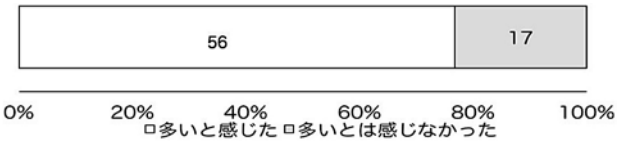
質問3. 実習日誌で苦労したことはどのようなことですか。

表1　実習日誌で苦労したことはどのようなことですか。

次に苦労した事 ＼ 一番苦労した事	出来事を表現できない	分量が多い	修正・書き直し	手書き	出来事が思い出せない	何を書いて良いのかわからない
何を書いて良いのかわからない	8	3				
出来事が思い出せない	3	1				1
手書き	7	8				
修正・書き直し	3	2		2		2
分量が多い	11		4	2	2	1
出来事を表現できない		3	1	4	2	3

（表内の数値は、回答者の数）

質問4. 保育の現場では手書きを行う事が多く、実習においても日誌や指導案は手書きです。実習日誌の記入方法についてどのように思いますか。



（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

図3　保育の現場では手書きを行う事が多く、実習においても日誌や指導案は手書きです。実習日誌の記入方法についてどのように思いますか。

○「手書きが良い」理由の自由記述
・現場では手書きが多いから、慣れておくべき。
・連絡帳は手書きだから、練習になる。
・手書きの方が読もうという気持ちになる。
・手書きの方が相手に伝わる感じがする。
・手書きを行う事で緊張感が増すと思う。
・意識するようになる、文章や字。
・温かみがある。
・パソコンは変換で漢字が出る。力にならない。
・ちゃんとしたものだから、手書きが一番。
・丁寧にやらなければいけないと思えるから。
・気持ちがこもっている。

○「どちらでも良い」理由の自由記述
・会社はパソコンが主流だが、手書きも大切だからどっちでも良い。
・パソコンの方が効率良い。しかし、手書きの方が良いもの（連絡日誌など、その場、その日でつかうもの）は手書きのままで良いと思う。
・パソコンは書き直しが可能だが、情報が漏れる可能性があるため、手書きが良い。しかし大変。
・書類はパソコンの方が、管理しやすいが、実習生は手書きで良いと思う。
・手書きかパソコンかよりも、内容の方が重要。
・学校の方法に学生は従うまでと思うから。
・やることは同じだから、分かりやすく工夫できればどちらでも良い。
・それぞれに良さがあるため、どちらでも良い。

○「パソコンの方が良い」理由の自由記述
・ほかのことに時間をかけることができる。
・パソコンが断然楽だと思う。漢字など辞書がついているため、修正がしやすい。きれいに書こうとしなくとも早くできる。時間短縮。
・鉛筆で下書きをして消す作業がないだけでも睡眠時間が違う。

(3) 第1研究のまとめ

学生たちは実習を通して、保育者の仕事内容に「書くこと」のイメージを持った。一方で、書くことが多い職業だとイメージしていた学生もいた。いずれにせよ記録には苦労しており、分量が多いと感じた学生の中には、手書きに苦労したと感じた学生がいた。パソコンでの文章作成になれている学生も多く、文章推こうの簡便さや、修正が簡単なことから、手で記入する事に苦手意識をもっている学生もいるようである。記入方法については、手書きが良いと答えた学生の内容は、情緒的な理由が多く、パソコンが良いと答えた学生は、時間に注目していることがわかった。

4. 第２研究

第2研究では、手書き、国語力そのものに注目し、「国語力」「手書き」についての質問を行うこととした。小学校教員以上の養成課程では、実習時の指導案作成にパソコンを用いることも多いが、保育者の実習における指導案作成では現在も手書きである。また幼稚園・保育所の現場においても保育者がパソコンを用いることは少ないと聞く。一方でレポート作成など、比較的長い文書を作成する際にパソコンを用いることが多い学生は、このような指導案や日誌、あるいは様々な場面での「手書き」について苦手意識を持っているのではないかと考えたからである。

(1) 方法

方　法　質問紙法による調査
対　象　対象Ｋ大学3・4年生42名・幼稚園教諭免許状と保育士資格の取得希望学生
実施時期　2013年4月

(2) 結果

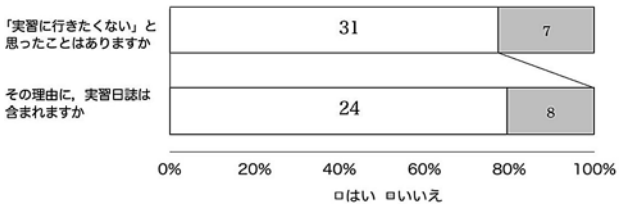
有効回答　39名（92.8%）、内訳：女子34名、男子5名

質問1. 日誌を手書きする際に苦労したことはどのようなことですか。（自由記述）

・下書きしてから本書きするのは時間がかかりすぎ。
・パソコンと違って「とりあえず打って、削る」ことができない。
・一日を思い出しながら自分の考えをまとめること。
・文章にすること、相手が分かるように。
・言葉のつかいかた、子どもへの反応の書きかた。
・漢字を調べて記入をしたこと。
・文章力と漢字。
・表現の仕方
・一つのことを具体的に書くこと。
・事実を正確に記すこと。
・出来事をよりわかりやすく書く。
・エピソードを簡潔にまとめること。
・文字のくせ字正し。
・誤字脱字、修正後の記入忘れ。

質問2.「実習に行きたくない」と思ったことはありますか。

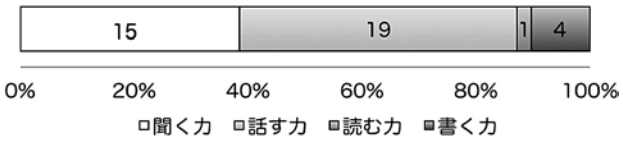
質問3. その理由に、実習日誌は含まれますか。〔(1) で「はい」と答えた人のみの回答〕。



（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

図4 「実習に行きたくない」と思ったことはありますか。その理由に、実習日誌は含まれますか。

質問4. 保育者に必要な国語力の具体的な力として、一番重要だと思う力を選んでください。



（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

図5 保育者に必要な国語力の具体的な力として、一番重要だと思う力を選んでください。

○「聞く力」が一番重要だとした理由
・相手の言葉、思いを自分が受け止めるべきだから。
・人は正確に伝えられることより、良く聞いて「正確に理解された」と感じられる方が安心すると思う。
・子ども、保護者、保育者同士の話を聞くことが必要。
・話してばかりでは、話し合いに参加できない。
・子どもの話を聞いて理解できないと、書くことも、話しかけることもできないと思うので。
・話に耳をかたむけること。聞き入れることが大切。
・子どもの話をしっかり聞いてあげる。
・話を聞く力がないと理解できないし、相手に寄り添うことができないと思う。
・相手の気持ちを知ることで、自分も表現できるから。

○「話す力」が一番重要だとした理由
・子どもにわかりやすく伝えなくてはいけないため。
・話をすることで理解ができる。
・保護者に短時間で伝えなければならないから。
・子どもの前に立って話す立場が多いから。
・説明しやすい話や説明力が必要だと思った。
・発達に応じた会話や保護者への報告が必要だから。
・何を相手に伝えたいのかなど、コミュニケーションは大切なこと。

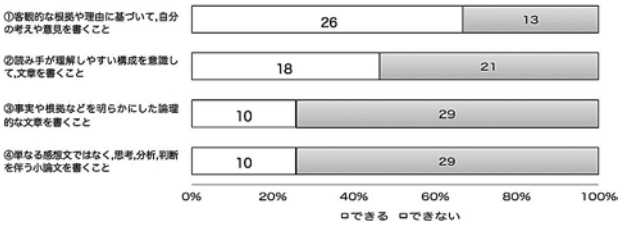
○「読む力」が一番重要だとした理由
・読んで伝えることは、子どもの聞く力や楽しさを育むと思うから。

○「書く力」が一番重要だとした理由

・日誌でだれにでも、場面が分かるような表現をする必要があるから。
・書く機会がとても多いから。

質問5. 以下の各項目は実習生として「できる」レベルに達していると思いますか。

① 客観的な根拠や理由に基づいて、自分の考えや意見を書くこと。
② 読み手が理解しやすい構成を意識して、文章を書くこと。
③ 事実や根拠などを明らかにした論理的な文章を書くこと。
④ 単なる感想文ではなく、思考、分析、判断を伴う小論文を書くこと。

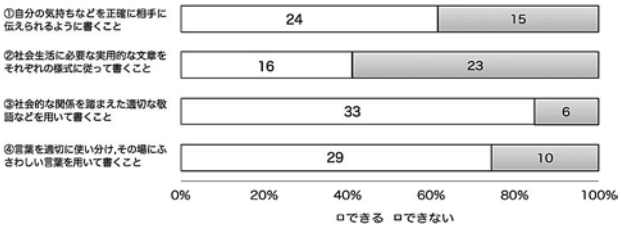


（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

図6　各項目は実習生として「できる」レベルに達していると思いますか。

質問6. 以下の各項目は実習生として「できる」レベルに達していると思いますか。

① 自分の気持ちなどを正確に相手に伝えられるように書くこと。
② 社会生活に必要な実用的な文章をそれぞれの様式に従って書くこと。
③ 社会的な関係を踏まえた適切な敬語などを用いて書くこと。
④ 言葉を適切に使い分け、その場にふさわしい言葉を用いて書くこと。

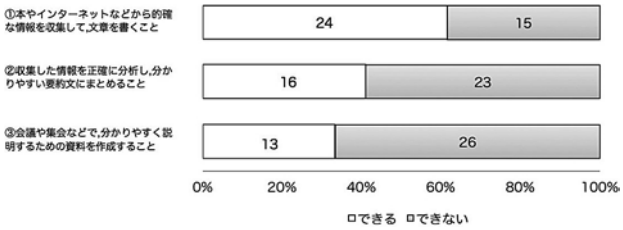


（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

図7　各項目は実習生として「できる」レベルに達していると思いますか。

質問7. 以下の各項目は実習生として「できる」レベルに達していると思いますか。

① 本やインターネットなどから的確な情報を収集して、文章を書くこと。
② 収集した情報を正確に分析し、分かりやすい要約文にまとめること。
③ 会議や集会などで、分かりやすく説明するための資料を作成すること。



（棒グラフ内の数値は、回答者の数）

図8　各項目は実習生として「できる」レベルに達していると思いますか。

(3) 第2研究のまとめ

手書きの苦労については、複数の学生が「文章力」「漢字」「誤字」を回答している。パソコンのように簡単には推こうできないことから、文章作成に苦手意識をもっている学生にとっては、毎夜の実習記録の記入を苦痛に感じる学生もいるのではないだろうか。「実習に行きたくない」理由として、実習記録が含まれていることから、記録を書くことに苦痛を感じ、「実習に行きたくない」と思う学生が出てくるのではないだろうか。保育者に必要な国語力として多く挙げられた力は「話す力」「聞く力」「書く力」「読む力」の順であった。「書く」仕事の多さは認識しながらも、「書く力」は保育者として一番にあげるほどの重要度ではないと考えている。場に適した言葉を用いて書くことはできると自己評価している学生が多いが、分かりやすい文章の作成はできない様子である

5. おわりに

今回、調査の対象となった保育者を目指している大学生たちであるが、質問紙の結果はいたずらに統計的手法を用いず、あえて実習を図表化した程度に留めた。今回は学生の傾向を知ることに重点を置いたからである。

以下は文化審が示した「望ましい国語力の具体的な目安」における「書く力」の目標は以下の項目である。

1）自分の考えや意見などを正確に伝える論理的な文章を書くことができる
　①客観的な根拠や理由に基づいて、自分の考えや意見を書くこと。

②読み手が理解しやすい構成を意識して、文章を書くこと。
③事実や根拠などを明らかにした論理的な文章を書くこと。
④単なる感想文ではなく、思考、分析、判断を伴う小論文を書くこと。

2）伝統的な形式や書式に従った手紙や通信などの文章を書くことができる
①自分の気持ちなどを正確に相手に伝えられるように書くこと。
②社会生活に必要な実用的な文章をそれぞれの様式に従って書くこと。
③社会的な関係を踏まえた適切な敬語などを用いて書くこと。
④言葉を適切に使い分け、その場にふさわしい言葉を用いて書くこと。

3）様々な情報を収集して、それに基づいて明確な文章を書くことができる
①本やインターネットなどから的確な情報を収集して、文章を書くこと。
②収集した情報を正確に分析し、分かりやすい要約文にまとめること。
③会議や集会などで、分かりやすく説明するための資料を作成すること。

出典：「2　聞く力・話す力・読む力・書く力」の具体的な目標　（平成16年　文化審議会「これからの時代に求められる国語力について」「第3　望ましい国語力の具体的な目安」より）

1）の①から④の項目は、第2研究の質問5の①から④である。2）の①から④は同じく質問6の①から④、3）の①から③は同様に質7の①から③である。この結果から、実習生として「できるレベルに達している力」と、「できるレベルに達していない力」が明らかになった。指導を行っている教員としては、学生に対して論理的な文章、思考、分析、判断を伴う文章を書くことが難しい印象をもっているが、学生の回答とはかけ離れているように感じる。学生自身も自分自身の国語力を正しく把握・理解できていないのではないだろうか。インターネット環境が整備・拡充され、携帯電話にも通話機能だけではなく、メールやソーシャルネットワークサービスの機能が搭載され、手軽に文字情報を発信できるようになってきた。それだけに、書くことの重要性や、推こうする事でより良い文章を作成する体験を行うことなく、自らの一瞬一瞬の思いを表現し、発信するだけに終わっているように感じる。相手がどのように受け取るのかまで意識していない。教員・保育士を目指す学生には、書くこと、記録をとることが、教員・保育士としての成長を促すことを伝えたい。

今後の課題として、前述のように「書く力」の目標に対する学生の自己評価と、指導する養成校教員の印象にずれがあることについて調査を行いたい。

引用文献・参考文献

石井秀宗ほか「大学教員における学生の学力低下意識に影響する諸要因についての検討」行動計量学、第34巻第1号、pp.67-77　2007
厚生労働省「保育所保育指針」2004
厚生労働省「保育所保育指針解説書」2004
白石崇人「保育者の専門性とは何か」社会評論社、2013
佐藤達全「短期大学における保育士養成について―基礎学力と学習意欲を中心に―」育英短期大学研究紀要、第27号、pp.45-58、2010
文化審議会「これからの時代に求められる国語力について」文化審議会答申、2004
文部科学省「幼稚園教育要領」2008
文部科学省「小学校学習指導要領」2008
和栗百恵「『ふりかえり』と学習―大学教育におけるふりかえり支援のために―」国立教育政策研究所紀要、第139集、pp.85-100、2010